よこまち余話（1）

（母と魚屋を切り盛りしている浩一には、中学に合格したばかりの弟・浩三がいます。次の文章は、弟の中学合格をどう祝えばいいか悩んだ浩一が、月に一度通う和菓子屋・光月堂に相談に行く場面です。）

浩三の中学合格をどうやって祝ったらいいものか、浩一はさんざん迷った挙げ句、光月堂の親爺さんに相談に行った。僕には①二心あるんです――愁嘆して告白する。

「ふたごころ？」

※番重の前で腕組みして、親爺さんは鸚鵡返しをする。娘さんと無事祝言をあげたばかりのあの背の高いお弟子さんが、のれんの奥から②案じ顔をひょっと覗かせた。

「それはですね、弟の合格をただ祝ってやりたいという正直な心と、弟の合格を誰彼構わず云いふらしたいという曲がった心のふたつです。それで、どうやってお祝いをすればいいのか、すっかりわからなくなってしまって」

ひと息に云ったせいで終いのほうでだいぶむせた。息が落ち着いてから、「まったく困りました」と眉のあたりを掻いた。

親爺さんは呆気にとられたふうに浩一を眺めてからお弟子さんと顔を見合わせ、③ふたり一緒に店が震えそうな音で噴き出した。腹を抱える両人を前に、浩一はただうろたえる。

「同じだよ、そりゃあ。二心なんかじゃねぇさ」

笑いの下から、親爺さんが云った。浩一はうれしいんだな、うれしくってしょうがないんだな。親爺さんは何べんも繰り返し、目尻に溜まった涙を拭った。

そういうことなら、紅白まんじゅうでもこしらえて、ご近所に配っちゃあいかがです？　云ったのはお弟子さんで、親爺さんも、④そりゃ名案だとすぐに乗った。うちで合格祝いの熨斗をつけてやるよ。それを配ればみんなに弟さんの合格が知れ渡る。まんじゅうをもらえば、周りもうれしかろう。おまいさんも嫌みなく弟を自慢できるってもんだ。

（中略）

浩一は、路地の住人と魚屋のお得意さんに配るために、十五箱の紅白まんじゅうを注文した。家に帰って、押し入れの奥に仕舞い込んであった木箱を取り出す。長年コツコツと貯めてきた小遣いを、背中を丸めて勘定し、「足りる」と、胸を撫で下ろした。

ふたごころ。

再び木箱を押し入れの奥に押し込んでから、浩一はつぶやく。親爺さんは笑ったけれど、やっぱりそのこと自体を喜ぶのと、みなに知ってほしいと思うこととは、ずいぶん隔たっているようだと改めて思う。

（木内昇『よこまち余話』中央公論新社　による）

※番重…和菓子などを入れる浅い重ね箱。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「二心」とは何を指しているか。本文中から二十字以上二十五字以内で二つ探し、それぞれ最初と最後の三字を答えなさい。

□□□ ～ □□□

□□□ ～ □□□

(2) ――線②「案じ顔」とはどのような顔か。適当なものを選びなさい。

ア 名案がありそうな顔。
イ 晴れがましい顔。
ウ 心配そうな顔。

〔　　〕

(3) ――線③「ふたり一緒に店が震えそうな音で噴き出した」とあるが、これはなぜか。最も適当なものを選びなさい。

ア 弟の合格をどうやって祝ったらよいかという、簡単なこともわからない浩一にあきれたから。
イ 弟の合格を云いふらしたいという気持ちを、よくない気持ちだと悩んでいる浩一がおかしかったから。
ウ 弟の合格がうれしくてしょうがないという浩一のことを、ほほえましく思ったから。

〔　　〕

(4) ――線④「そりゃ名案だ」とあるが、なぜ名案なのか。適当なものを選びなさい。

ア まんじゅうを配れば周りもうれしいので、嫌みにならずに弟の合格を自慢できるから。
イ まんじゅうで合格を祝えば、みなに弟の合格を知ってほしいという気持ちをおさえられるから。
ウ まんじゅうの合格祝いであれば、浩一が貯めてきた小遣いでも十分なお祝いができるから。

〔　　〕